

## 「邦楽 4 人の会」の誕生 オーラル・ヒストリーの中のモスクワ青年学生平和友好祭 (1957)

梅津紀雄・半谷史郎

### はじめに

明治維新以降、日本は洋楽の導入に努め、現代では J-pop や演歌も含めて西洋音楽の影響に覆い尽くされ、伝統音楽の方がエキゾチックに聞こえる現実がある。東京藝術大学音楽学部が発足当時、邦楽科を欠き、同科が 1 年遅れて発足したことに象徴されるように、終戦直後も邦楽はあからさまに軽視されていた。敗戦の結果、伝統的なものに否定的な眼差しが向けられたこともその背景にはあった。しかしながら 1960 年代、空前の現代邦楽ブームが起こる。その礎を築いたのが邦楽器演奏家 4 人からなる「邦楽 4 人の会」であった（創設メンバーは、北原篁山、菊地梯子、矢崎明子、後藤すみ子）。

「邦楽 4 人の会」の活動自体は、ロシアともソ連とも直接の関係はない。だが、同グループの発足のきっかけは 1957 年にモスクワで開催された第 6 回世界青年学生平和友好祭 (VI Всемирный фестиваль молодёжи и студентов за мир и дружбу, 以下、友好祭と略) にあった。<sup>1</sup> この友好祭は共産圏と中立国の首都を開催地とし、平和を旗印に資本主義国も含めた各国の青年・学生が集い、演奏やパフォーマンス、見学や討論を行いながら、友好を深める大イベントだった。そこでは様々なコンクールも実施され、ギターや声楽、民族楽器などの部門で軒並み日本人が優勝した。「邦楽 4 人の会」の人々も民族楽器コンクールに出場して優勝を勝ち得ている。

モスクワ友好祭がソ連史において重大な結節点の一つであったことは明らかであるが、この大イベントは日本においては、ほとんど注目されてこなかった。その際の日ソの草の根交流の側面に至っては、まったく研究は存在しない。日露・日ソ交流史の蓄積には顕著なものがあるが、独ソ戦・太平洋戦争以前のものが大半を占めており、特に雪どけ期の研

---

<sup>1</sup> 60 周年を迎える 2017 年には、第 19 回大会が冬季オリンピックの開催地でもあったソチで開催されることが決まっている。公式ホームページは以下の通り。[<http://www.russia2017.com/>] (2016 年 11 月 29 日閲覧)。

究は少なく、スポーツニク・ショックなどでロシア語熱が高まっていた事実もほとんど知られていない。<sup>2</sup>ましてや、友好祭参加者のように、社会主義やソ連に惹かれたわけでもない人々が訪ソをきっかけとしてグループを結成したこと、その記憶を片隅において今日まで演奏を続けてきたことはまったく未知の領域のままなのである。従って、まずは研究の余地があることの問題提起が狙いの一つである。そのことは雪どけ期の日ソ交流一般についての関心を喚起することにもつながるはずである。

それゆえ、記述に当たっては、事実を丹念に掘り起こして、当時の文献や回想によって状況を鮮明に描くことを柱としたい。その上で、特にソ連や社会主義に関心がなかった人々が現地で何を感じ、何を掴んで帰国したかを明らかにし、彼らのその後の活動についても、現代邦楽の流れを追いながら、ソ連の文化史とも比較しつつ検討していきたい。特に重視したいのは彼ら自身の証言である。というのも、「邦楽4人の会」メンバーを含め、友好祭の経験者は既に85歳前後の高齢である。「邦楽4人の会」の創設メンバーの一人である後藤すみ子氏の証言を初めとして、彼らから聞き取った当事者の貴重な生の声を後世に伝えることも本稿の重要な目的としたい。

なお、先行研究についてだが、モスクワの友好祭そのものの文献は少なくないが、当時の一次史料と回想が大部分で、研究の対象として扱った二次文献はきわめて限られており、特に日本代表団についての研究は皆無である。本稿では、上述のように、既存の一次史料を活用しながら、新たに筆者が聞き取りを行った史料を駆使して、<sup>3</sup> 当時の状況をより鮮やかに描いていきたい。なお本論で使用した写真はすべて後藤すみ子氏の提供による。

## 1. 戦後の邦楽教育について

### 1-1. 新制大学発足時の邦楽の位置づけ

明治維新以降、日本は国民教育を整備していく中で、「唱歌」教育を通じて西洋音楽を導入し、邦楽ではなく西洋音楽によって国民形成を図っていった。現在大多数の日本人が長短音階の歌を何かしら歌うことができ、西洋音楽を違和感なく聞くことができるのは、

<sup>2</sup> 理系のロシア語ブームは、以下を参照。玉木英彦『科学ロシア語のすすめ』総合図書、1967年。

<sup>3</sup> 後藤すみ子を含め、以下の8氏にインタビュー済み。川村秀（2015/4/4、友好祭事務局）、河崎保（2015/5/3～4、モスクワ放送局アナウンサーとして友好祭を取材、妻の美智子が開会式に参加）、後藤すみ子&鈴木巖（2015/9/20）、長崎真人（2015/10/30、当時、民青同盟神奈川県委員長）、後藤すみ子（2回目、2015/10/31）、川端香男里（2016/3/20、仏語通訳として参加）、安井侑子（2016/3/27、当時、お茶の水大学生）、城田俊（2017/4/3、露語通訳として選出されるも、150名から洩れて不参加）。これらインタビューの内容は、本論で特に出典を明記せず引用する。

この成果である。だがそれは同時に、伝統的な日本の音楽、邦楽器を用いた音楽をエキゾチックと感じるような感性を生み出した。

《君が代》の成立過程に現れているように、明治時代前半には「雅楽派」（儒教派、宮内省を中心とする）と「西洋音楽派」（開明派、文部省を中心とする）が拮抗しており、現行の《君が代》が雅楽の旋法によって作曲されていることは、「雅楽派」が一定の勢力を形成していたことを如実に示すものである。しかし、教育の現場では西洋音楽を軸とした唱歌教育が生き残った結果、雅楽による音楽教育は普及せず、逆に西洋音楽が日本の音楽環境を規定していくことになる。<sup>4</sup> こうした教育現場での動向は同時に、邦楽一般に対する否定的な見解を流布させるに至り、邦楽を公教育から排除する結果を招いた。それは、戦後の伝統文化否定の流れのなかで、新制大学発足の際の邦楽科の排除として前景化する。

その唱歌教育の中核を担った音楽取調掛（1879-1887）はその後、東京音楽学校（1887-1952）に改組され、終戦を迎え、同じく官立専門学校の一つだった東京美術学校とともに、戦後、新制大学の一つとして東京藝術大学に再編される。東京音楽学校には1936年に邦楽科が設置されていたが、東京藝大に再編される際、大学移行への準備に当たっていた小宮豊隆校長が邦楽科は不要と主張した。もともとの邦楽軽視に、戦前の国粹主義と邦楽が結び付いて理解された結果、洋楽関係者の中にもともとあった邦楽に対する嫌悪感が噴き出す形で、小宮校長の主張が通り、1949年の発足当時は邦楽科を欠いた組織で出発した。これに対し、邦楽科設置運動が起こり、一年のブランクを経て邦楽科が設置されるに至る。<sup>5</sup> 洋楽畑の山根銀二らとともに邦楽を擁護して論陣を張った吉川英史は、邦楽科の廃止によって、邦楽には芸術的な価値がないというイメージが一般に流布することを危惧していた。<sup>6</sup> だが、後述のように、邦楽科の復活によっても、邦楽軽視を払拭することはできなかった。

## 1-2. 東京藝大音楽学部邦楽科での教育：後藤すみ子の場合

ここで「邦楽4人の会」の創設メンバーの後藤すみ子氏（1931-）を例に、戦後の邦楽教育のありようを検討しておきたい（以下、敬称略とさせていただきます）。後藤は、父が尺

<sup>4</sup> 唱歌と《君が代》については、たとえば、以下の書を参照。安田寛『「唱歌」という奇跡 十二の物語—讃美歌と近代化の間で（文春新書 346）』文藝春秋、2003。

<sup>5</sup> 吉川英史は、CIE（米民間教育情報局）への陳情以降、状況が変化したことを証言している。吉川英史『三味線の美学と芸大邦楽科誕生秘話』出版芸術社、2002年、333-335頁。

<sup>6</sup> 福岡正太「小泉文夫の日本伝統音楽研究—民族音楽学研究の出発点として—」『国立民族学博物館研究報告』第28巻、2003年、269-270頁。

八を吹いていた関係で邦楽に縁があり、ピアノに関心はあったが、「日本人だから当たり前だ、邦楽をやるんだ」との父の主張で、9歳の時から姉とともに箏を習うことになった。当初はあまり熱心でなかったというが、戦争経験を経て「何か美しいものをやりたい」気持ちが生じ、それが戦後、箏を再開する際の動機づけとなった。当初は父の知人の中島雅楽之都（1896-1979）に、その後、中島靖子（1926-）に師事するようになり、その一番弟子となった（実はこの時期より五線譜に接していたことが後で大きな意味を持つてくる）。女学校を終えるころ、新制大学として発足を目前としていた東京藝大音楽学部への受験を勧められ、新制高校に半年ほど通って受験資格を得た後、邦楽科を受験して一期生として入学した。

藝大では宮城道雄（1894-1956）に師事した。藝大の授業は多くを洋楽の学生と共に学び、和声学と対位法は下総皖一（1898-1962）、楽式論は石桁真礼生（1915-1996）と「最高の先生に習っている」と振り返っている。藝大を1954年に卒業すると、専攻科に進学（当時は大学院はなかった）、修了直後に日本舞踊の五条珠実（1899-1987）の音楽担当者の一人として欧州に渡航し、《春の海》など邦楽の公演も行った。この経験が友好祭代表に選ばれた要因の一つであった。

専攻科修了後は、NHKが開始したばかりのNHK邦楽技能者育成会に第2期生として学んだ。同会は、現代邦楽を論じるうえで欠かせない重要な教育組織であり、惜しまれつつ2010年3月に第55期生卒業とともに終了したが、第～期生と名乗ることが今日もお邦楽演奏家にとって一種のステータスとなっている。ここで多くの若手演奏家たちが五線譜やソルフェージュなどの洋楽の基礎を身に着け、流派の垣根を超えたアンサンブルを経験したことが現代邦楽の発展の基礎を築くことになる。「邦楽4人の会」のほかの3名も育成会の卒業生であった（後に、後藤自身も第51期から5年間講師を務めている）。

## 2. 世界青年学生祭と第6回モスクワ大会

### 2-1. 世界青年学生祭とは何か

次に、彼らが参加したモスクワ大会（1957）を含む世界青年学生祭について概説しておく。世界青年学生祭（World Festival of Youth and Students）とは、世界民主青年連盟（World Federation of Democratic Youth, WFDY）と国際学生連盟（International Union of Students, IUS）の両者によって主催された、文化のオリンピックになぞらえ得るような国際的な文化イベントである。コンサート、舞踊パフォーマンス、サーカスといった様々なパフォー

ミング・アーツを取り込み、工場見学や討論会、平和集会などの社会的な催し物も行き、並行してスポーツ大会まで開催される巨大なイベントだった。<sup>7</sup> 1957年7月28日から8月11日まで開催されたモスクワ平和友好祭には131カ国から3万4000人が参加している。

1947年の第1回プラハ大会以降、現在までの開催年と開催都市は次の通りである。第2回ブダペスト（1949）、第3回ベルリン（1951）、第4回ブカレスト（1953）、第5回ワルシャワ（1955）、第6回モスクワ（1957）、第7回ウィーン（1959）、第8回ヘルシンキ（1962）、第9回ソフィア（1968）、第10回東ベルリン（1973）、第11回ハヴァナ（1978）、第12回モスクワ（1985）、第13回ピョンヤン（1989）、第14回ハヴァナ（1997）、第15回アルジェ（2001）、第16回カラカス（2005）、第17回プレトリア（2010）、第18回キト（2013）。うち最大の参加国を数えたのは第13回のピョンヤン大会、最大の参加者数を記録したのは第6回のモスクワ大会であった。なお、第3回から第14回までは、スローガンとして「平和と友好」が歌われてきたため、世界青年学生平和友好祭と呼称されてきた。日本での一般的な略称は、「平和友好祭」や「友好祭」であり、本稿では「友好祭」と略すことにする。

ちなみに、ロシアがらみで付言すると、第1回のプラハ大会にはバレリーナのマイヤ・プリセツカヤもコンクールのソ連代表の一人として参加し、これが彼女の初めての外国公演だった。<sup>8</sup> 大川郁夫夫妻、米川正夫らが参加したブカレストの友好祭（1953）では、旅券獲得運動が行われたが、<sup>9</sup> 「大会の目的はソ連を中心とする平和攻勢を援助するもの」と否定され、<sup>10</sup> 政府はこれを拒否し、無着成恭（1927-）を団長とする代表メンバーは密航を余儀なくされた。また出入国管理法違反でアカハタ編集局などが手入れを受けた。<sup>11</sup> 1955年の第5回友好祭（ワルシャワ）には「うたごえ運動」の指導者、関鑑子が参加、このとき、バス歌手部門で優勝したアルトゥール・エイゼンは、翌年「うたごえ」の祭典に招か

---

<sup>7</sup> モスクワ友好祭を軸とした代表的な概説を掲げる。Герасимова, О.Г. К вопросу об участии Московского университета в подготовке и проведении Всемирного фестиваля молодежи и студентов 1957 г. // Вестник Московского университета. Серия 8. 2005. № 1. С. 35-64; Pia Koivunen, “The Moscow 1957 Youth Festival: Propagating a New Peaceful Image of the Soviet Union,” in Melanie Ilic and Jeremy Smith eds., *Soviet State and Society under Nikita Khrushchev* (London: Routledge, 2009), pp. 46-65.; Gleb Tsipursky, *Socialist fun: youth, consumption, and state-sponsored popular culture in the cold war Soviet Union, 1945-1970* (University of Pittsburgh Press, 2016), pp. 134-162.

<sup>8</sup> マイヤ・プリセツカヤ（山下健二訳）『闘う白鳥：マイヤ・プリセツカヤ自伝』文芸春秋、1996年。また、以下も参照。Семичастный В.Е. Беспокойное сердце. М., 2002. С. 69.

<sup>9</sup> 旅券運動について以下の報道がある。「予備隊が解散させる 旅券交付で座込む東大生」『毎日新聞』1953年8月1日朝刊、7面。

<sup>10</sup> 「出入国管理令違反 日共本部など19か所」、「ブカレストの平和友好祭とは...」『毎日新聞』1953年11月21日夕刊、3面。

<sup>11</sup> 容疑者16名には、モスクワ大会にも関与した河崎保・美智子夫妻が含まれていた。

れて初来日し、その歌声を披露することになる。ヴァイオリンでは岸辺百々雄が5位入賞、作曲（管弦楽）部門で芥川也寸志が第3位に、小林秀雄の行進曲が特別平和賞を受賞、さらには作曲（歌曲）部門で木下航二作曲（浅田石二作詞）《原爆許すまじ》が第2位に入り、広島原爆記念日の8月6日に千人以上の各国合同の合唱団で歌われたことも、関が伝えている。<sup>12</sup>

## 2-2. 第6回世界青年学生祭（モスクワ大会）について

第6回にして初めて、社会主義の「祖国」ソ連で開催に至ったわけだが、時代背景を考えてみれば、その理由は明らかであろう。すなわち、外国からの影響を恐れてほとんど鎖国に近い体制だったスターリン時代のソ連なら、外国人を大量に受け入れるようなイベントの開催など、論外だった。そこから逆に1957年当時のソ連の姿勢も鮮明に現れてくる。「閉鎖」から「開放」への明示的な転換であり、戦後復興を果たしたソ連の首都モスクワを披露し、また平和と友好の理念を実践的に示すという狙いが見えてくる。

この大イベントは、様々な意味で神話化されてきた出来事であった。リチャード・スタイツは「文化史における大きな転換点 a great turning point in cultural history」と評している。<sup>13</sup> 雪どけ期の文化史において特筆すべきイベントであり、ソ連邦解体はこの時から始まったとみなす見方さえある。モスクワ市民を中心としたソ連人がほとんど初めて外国人と接し、彼らを通じて、ジーンズやロックに象徴される西側の最先端の文化に触れることになったからである。<sup>14</sup> シンボルマークは五大大陸を表す五色をあしらひ、中央には「平和と友好のために За мир и дружбу」、その周囲に「第6回世界青年学生祭・モスクワ 1957 VI ВСЕМИРНЫЙ ФЕСТИВАЛЬ МОЛОДЕЖИ И СТУДЕНТОВ」と記されていた。大会の実際の組織に当たったのは、コムソモール（共産青年同盟）であり、その長は第一書記で共産党中央委員のアレクサンドル・シェレーピンだった。シェレーピンは後に KGB（ソ連国家保安委員会）の二代目の議長を務めたことで知られる。なお、モスクワの平和大通り Проспект мира は友好祭の開催を記念して命名されていることを付け加えておこう。

---

<sup>12</sup> 『『原爆許すまじ』を各国合同で大合唱 帰国の関女子語る ワルソーの世界青年平和友好祭』『毎日新聞』1955年8月26日夕刊、4面。

<sup>13</sup> Richard Stites, *Russian Popular Culture* (Cambridge University Press, 1992), p. 132.

<sup>14</sup> ロックの流入の衝撃については以下を参照のこと。鈴木正美『ロシア・ジャズ 寒い国の熱い音楽』東洋書店、2006年、33頁。ティモシー・ライバック（水上はるこ訳）『自由・平等・ロック』晶文社、1993年、62-63頁。

### 3. 代表団選出からコンクールまで

#### 3-1. 代表団の選出について

友好祭の組織委員会からの招聘を受け、日本実行委員会が組織された。同委員会は会報『友好祭ニュース』を発行し、準備状況を報告している。<sup>15</sup> 不明の細部も多いが、中心となった一人は土方与平（1927-2010）とみて間違いない。<sup>16</sup> 日本への割り当てられた人数は500名であった。なにせ外国渡航の機会が貿易会社の社員や留学生・研究者に限られていた時代である。<sup>17</sup> ここでは詳述しないが、500名への絞り込みにも様々な困難があった。神奈川県代表として参加した長崎真人は「このモスクワ祭典への代表派遣運動は、戦後の青年運動の中で、恐らく空前絶後の幅を持った大運動だったと言ってよい」と述べている。<sup>18</sup> 名簿には、後年ロシア研究者として名を成す人々も含まれており、実際の渡航者だけでも、山本香男里（川端香男里、仏語通訳として）、安井侑子（当時、お茶の水女子大学学生で最少年参加、翌年にレーニン平和賞を受賞する安井郁の長女）など錚々たる名前を見出すことができる。

#### 3-2. 邦楽代表団の選出

「音楽」部門の邦楽代表団は、当初の500名の名簿では、菊地梯子、後藤すみ子、土橋明（後の矢崎明子）、北原正邦（後の北原篁山）、平井澄子、宮崎智の6名であった。後藤の選出の母体は三曲<sup>19</sup> 協会であり（名簿上の所属は宮城会）、実質的に選出に当たったのは、山根銀二、平井澄子、吉川英史の三氏だという。当初、外国経験のある人の選出が検討されていたが、ソ連に行くことでアメリカなど西側に行けなくなる懸念があり、外国経験者は後藤のみとなった。<sup>20</sup> 後藤いわく、「アメリカにはいつ行けるか分からない。（アメ

---

<sup>15</sup> 『友好祭ニュース』は、法政大学大原社会問題研究所が所蔵。1957年4月30日付の第1号によると、第1回の実行委員会は4月6日に衆議院第二会館で開催。

<sup>16</sup> 土方与平は土方与志の次男で、劇団『青年劇場』製作局長を務めた。川端香男里の回想によれば、川端は土方から直接依頼を受けている。仏語通訳の派遣は土方個人の仏語重視の姿勢によっているが、実際にはあまり仏語の需要はなかったという。土方与平はうたごえ運動発足のきっかけを作っており、うたごえ運動と友好祭は緩やかに結びつく関係にある。他方、城田俊は通訳選出にあたって、試験があったことを回想している。

<sup>17</sup> 渡航自由化は、1964年4月1日から。

<sup>18</sup> 長崎真人『命ある限り』光陽出版社、2007年、229頁。

<sup>19</sup> 箏と三絃（三味線）と尺八の三種類からなる合奏を三曲という（江戸時代には尺八ではなく、胡弓が一般的であった）。

<sup>20</sup> なお、舞踊代表の決定については以下の報道がある。「舞踊代表決まる モスクワの平和友好祭に送る」『読売新聞』1957年5月30日夕刊、4面。

リカでなくても) 外国に行くチャンスがあったら、行ってみたいと思った」。前年によく国交回復を果たしたとはいえ、当時のソ連のイメージは国内を二分するものがあった。ただ、共産主義について無関心であったり、否定的であったりしたとしても、ドストエフスキー、トルストイ、ムソルグスキー、チャイコフスキー、ハチャトゥリャンやプロコフィエフを輩出した国として好奇心がたきつけられた側面はあった。言い換えれば、ソ連というよりもロシアに対する関心があったのだ。<sup>21</sup>

### 3-3. 旅券闘争と代表団の絞り込み

ソ連からの招待に応じて結成された500名の代表団に対し、日本政府はあまりにもこの数は多いと考えた。やむを得ないことだが、日本政府はソ連の影響力を極度に(そして不必要に)警戒し、代表団が共産主義の思想に染まって帰国することを強く懸念していた。

友好祭は「平和友好」が旗印であり、8月6日の原水爆実験禁止の大集会を一つのクライマックスとし、民族文化の多様性に幾重にも注意を払っていること、またアメリカの原水爆に対する姿勢や黒人差別などを暗に批判する意図が見え隠れすることからも、政治性を読み取ることは容易である。しかし、参加者の眼に映った友好祭には政治色がほとんどなかったことで、様々な報告・回想の見解は一致している。例えば、写真部門の代表、田沼武能と八木下弘は以下のように報告している。「要するにあなたと私とを友情でつなぎましょうというのだ。そうすれば友達同志なら戦争をしないから平和になる。つまり唯一つのスローガンは、友情と平和なんですよ」(田沼)、「実際にいってみると、なんのことはない、お祭りなんですよ」「友情を通じてやっていけば平和になるんだ、そういう軽い気持ちでみんなきているんですよ」(八木下)。<sup>22</sup> また、「4人の会」のリーダー、北原篁山はこのように振り返っている。「こんどの友好祭は文字通りお祭りであって、政治とか宗教とか人種とかには本当に関係のない、人間同志のつきあい、集いと云った様なものだったんです。僕等が向うへ行っていた間、政治的なカラーと云うものは一度も示されませんでしたし、帰ったらこう云って呉れと頼まれたこともないんです」。<sup>23</sup> 第五福竜丸(1954)事件以後、原水爆禁止の運動は日本で高揚しており、《原爆を許すまじ》も広く普及していた。反戦平和がことさらにソ連的なメッセージとは受け取られないムードがあったのだ。

<sup>21</sup> ただし、川端香男里は、映画《シベリア物語》上映の頃を振り返って、「当時はソ連とロシアは区別して考えられてはいませんでした」と述べている。

<sup>22</sup> 田沼武能、八木下弘「第6回世界青年・学生平和友好祭に出席して」『日本カメラ』1957年10月号、207頁。

<sup>23</sup> 「第六回世界学生青年平和友好祭に臨んで」『邦楽の友』1957年10月号、54頁。



上述のように、政府が500名全員の渡航を認めなかったため、いわゆる旅券闘争が始まった。現在の日本では一定期間有効の数次旅券（パスポート）に統一されているが、当時、一般には渡航の機会があるごとにその渡航目的に限って発行されるシングル旅券しか発行されなかったことが背景にある。

当初50名程度との線を外務省は提示してきたが、なぜ50名がよくて500名がダメなのかなどと反発が出て運動が続けられ、最終的に150名に旅券を出すとの通告が出された。<sup>24</sup> 実行委員会はこれを飲まずに外務省前でハンストを行ったが、150名の線を動かすことはできず、妥協が成立した。だが、それぞれが出身母体を持ち、また親戚・友人・知人・先輩・後輩などからカンパ・餞別をもらっての渡航準備であり、簡単に「席」を譲るわけにはいかなかった。150名への絞り込みも困難をきたした。その実際の選別の過程には不明の部分も多いが、芸術部門に関してはいくつかの証言から一定の経緯がわかっている。

7月17日未明のことである。絞り込みの場の後藤自身は不在だった。鈴木曰く、「今だから言いますが、みんな行きたいわけですよ。なのに平井さんが『まず私が降ります、若い人が行って下さい』と切り出したことで、話がスムーズに行った」。平井澄子が辞退したことをきっかけに、若手に譲ろうという機運が生まれ、険悪な雰囲気でも暴力沙汰も予期された代表者選びは収束した。<sup>25</sup>

後に「邦楽4人の会」を結成する面々を推した吉川英史は、40周年記念演奏会のプログラムに当時を回想している。

強烈な思い出として、今も脳裏から消えない。1957年当時は、海外へ行くことは多くの制約があり、しかもソ連とは国交回復直後だったので、この時の[...]モスクワ行きの希望者・希望団体は非常に多く、その選定は誠に楽ではなかった。結局選定会議は徹夜となり、山根銀二さんと私が推した4人の邦楽組が選に入ることに決まったのは、出発当日の夜明けの5時ごろだったろう。

私の生涯を振り返ると、苦勞の拳句の成功で涙ぐんだのは、この時と芸大邦楽科設置決定の朗報を受けた時であった。<sup>26</sup>

<sup>24</sup> 「百五十人まで譲歩—有田氏あっせんで」『毎日新聞』1957年12日夕刊、7面。なお、スルツキー監督の記録映画《私たちはモスクワで友好を暖めた Мы подружились в Москве..》（1957）でも旅券闘争の様子が映る。

<sup>25</sup> 以上の事情については、以下の記述が詳しい。「世界青年平和友好祭 代表決定始末記 百人が三十五人になるまで」『音楽新聞』1957年8月4日付。

<sup>26</sup> 吉川英史「創立40周年に寄せて」『邦楽4人の会 第60回定期演奏会 創立40周年記念シリーズ』（プログラム、平成9年4月16日、東京文化会館、主催・邦楽4人の会）

なお、代表団は医師などの別枠5名が認められ、155名となった。<sup>27</sup>

### 3-4. モスクワへの旅

7月17日の日中にパスポートの受取、予防接種などをあわただしく済ませた一行は、午後10時半の準急「佐渡」で上野から新潟へ向かった。<sup>28</sup> 乗船したモジャイスキー号は7月19日朝6時に新潟を出港し、20日午後4時にナホトカに到着、<sup>29</sup> すぐさまシベリア鉄道に乗り換えて、一路モスクワを目指した。一行を何より驚かせたのは、停車する駅々での地元住民の歓迎ぶりだった。どの駅にも多くの人々が待ち構えていて、日本代表団を歓迎でもみくちやにした。ナホトカ到着時の出迎えの人々は、新潟出港時よりも「桁違いに多かった」という。<sup>30</sup>

この「歓迎」には公的な「動員」の側面もあったはずだ。だが、情報の少ない時代にあつて、国交を結んだばかりでほとんど未知の国の日本の人々が多数「わが町」を通過するとあつては、好奇心をたきつけられても当然であり、単に動員だけの結果とは言えず、「日本人を見てやろう」という意識が感じられたという。お互いのバッチの交換や片言の外国語や身振り・手振りでの交流が駅に停車する度に行われた。<sup>31</sup>

モスクワに向かう途中、シベリア鉄道の旅程では開会式に間に合わないことが分かった。そこで一部の代表だけを飛行機で先にモスクワに旅立たせることとなり、コンクール開催が迫っていた民族楽器部門の代表団のメンバー4名など20名が選ばれて飛行機で先を急いだ。プロペラ機の時代、一度にモスクワに飛ぶことはできず、機内食もなく、給油と食事のためにたびたび地上に降りての空路であった。他方、モスクワの友好祭と並行して開催された第三回世界青年友好スポーツ大会の代表団たちは、最初から空路で、両者には顕著な格差があった（「特別待遇だった。モジャイスキー号でも上だしね。私たちは一番下の地下室」と後藤は証言している）。

### 3-5. 開会式

20名の先発隊は7月22日にモスクワに到着し、バスでホテル「オスタンキノ」に落ち

<sup>27</sup> 「代表団今朝新潟へ 平和祭 百五十五人に旅券」『毎日新聞』1957年7月18日朝刊、9面。

<sup>28</sup> 『第六回青年学生平和友好祭 報告書』（日本青年団協議会）、1957年、3頁。

<sup>29</sup> 「選手団らナホトカ着」『読売新聞』1957年7月21日朝刊、11面など。

<sup>30</sup> 八木下弘編『ソビエト民衆の表情』三笠書房、1957年。

<sup>31</sup> インタビュー時に多くの方が、当時もらった絵葉書やバッチのコレクションを見せてくださった。

着いた。翌朝から、記者会見、座談会、録音と多忙な時間が続き、7月28日、開会式を迎える（スポーツ大会は翌日29日の開幕）。

当日はそろいの振袖姿や紋付き袴に着替えてパレードに臨んだ。まずホテル前の農業博覧会会場に集合すると、国ごとに割り振られたトラックに乗り、街中をパレードし、膨大な数の人々の歓迎を受けた。着物姿だった彼らは「サイン攻めと握手を求められ、手が痛くなるほど」であった。<sup>32</sup> 前年に完成したばかりのレーニン・スタジアム（現在のルジニキ・スタジアム）に到着してからは国別の入場行進である（ロシア語アルファベット順のため、日本 Япония 代表は外国の最後、トリを飾る主催国ソ連の直前であった）。その時の写真を見ると、着物姿の女性7人が目を引く。後藤、菊地、矢崎の邦楽3人と被爆者で「原爆少女」として有名だった永田尚子は先発隊だが、そのほかに当時モスクワ音楽院留学中だった小野光子（ソプラノ歌手、うたごえ運動の指導者・関鑑子の娘）やモスクワ放送勤務の河崎美智子が応援に加わっていた。<sup>33</sup> この写真はタス通信の配信で、毎日新聞や日本経済新聞にも掲載された（読売新聞はAP通信の写真を掲載し、「スタンドはまったくのお祭り騒ぎ」「行進はこれまた楽隊、ダンス入りのドンチャンさわぎで青年祭の呼び名にふさわしい夏の民族祭典」

と報じている）。想像できないほど盛大な式典であり、圧倒的な印象を受けたようである。

「開会式は盛大な式典だとは思っていなかった。浴衣姿で、花笠踊りをしながら出て行くつもりだった（練習してははず）。それくらいの軽い気持ちだった」（後藤談）。



パレードの際、日本代表団は原爆反対のプラカード「原水爆実験禁止協定を結ぼう」を掲げていた。前述のように、第五福竜丸事件の記憶の新しい時期だった。政治的な内容ではあるが、その場においては、日本代表に最もふさわしいスローガンであり、「原爆の体験者もいらっしやるわけです」「違和感を感じなかった」と後藤は述べている。

<sup>32</sup> 菊地梯子「現代邦楽とともに（五）世界青年平和友好祭に参加して」『音楽の世界』2000年5月号、15頁。

<sup>33</sup> 「七名の婦人代表」については以下も参照。杉山金夫『モスクワ見たまま 第六回世界青年学生平和友好祭に参加して』（第七回世界青年学生平和友好祭静岡県実行委員会）、1959年、10頁。プカレスト大会にも参加した河崎保・美智子夫妻については「郷夫妻」として言及されている。

また前述したスポーツ大会に出場したレスリング選手の石沢二郎は、一観客として見た開会式の印象を次のように語っている。

モスクワへ着いて1週間たってから見物した平和友好祭の開会式ほど、私の心を打ったものはありませんでした。世界中から集まった何万という人たちをモスクワ市民が迎え、口々に「平和と友情のために」と叫ぶ姿を見て、これだけの人々の熱意があれば決して再び戦争は起こるまいと思えたものでした。<sup>34</sup>

### 3-6. コンクール

翌29日（シベリア鉄道組のモスクワ入りの日）、コンクールの開会式が行われた。くじ引きで審査の順番を決め、箏・三絃の代表3人は93番を引き、8月2日3時15分を指定された。一方、ともに「邦楽4人の会」を結成することになる北原篁山



は民族楽器の管楽器部門に出場した。弦楽器（アンサンブル）部門の3人の出場曲は、予選：宮城道雄作曲《落葉の踊り》と光崎検校作曲《五段砧》，本選：宮城道雄作曲《さくら変奏曲》，管楽器部門の北原篁山の出場曲は、予選：中尾都山作曲《本曲木枯》，宮城道雄作曲《春の海》，本選：古典本曲《鶴の巣籠り》であり、いずれも古典と近代（新日本音楽<sup>35</sup>）との二本立てであった。<sup>36</sup>

一同を喜ばせたことに、声楽の滝沢三重子、ギター鈴木巖とともに、全員がそろって各部門で第一位金賞を受賞した。第一報として、読売新聞、毎日新聞はタス＝共同の配信記事としてギター部門鈴木巖を「入賞、金メダルを獲得」と簡潔に報じた。<sup>37</sup> 続けて、毎日新聞は「世界青年友好祭の芸術コンクールの結果が8日発表された」として、「声楽ソ

<sup>34</sup> 昭和35年 異国で聴いた「君が代」に感激いっぱい（石沢二郎）

[[http://www.mejiwrestling.com/modules/pico0/index.php?content\\_id=42](http://www.mejiwrestling.com/modules/pico0/index.php?content_id=42)] (2016年11月29日閲覧).

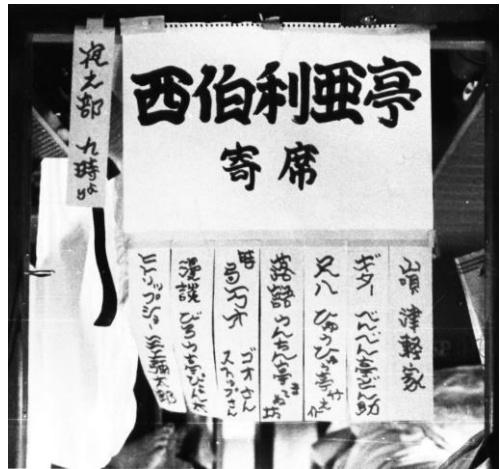
<sup>35</sup> 宮城道雄（箏）や吉田晴風（尺八）による邦楽改革運動、およびそれに伴って生まれた作品群を新日本音楽と呼ぶ。戦後は、「現代邦楽」の呼称が生まれるまで、続く世代の邦楽改革運動をも包括して「新邦楽」と呼ぶようになった。本稿では「新日本音楽」で統一する。

<sup>36</sup> 「第六回世界学生青年平和友好祭に臨んで」『邦楽の友』1957年10月号、57頁。《六段》を弾いたとの回想もある。

<sup>37</sup> 『読売新聞』1957年8月8日朝刊7頁、『毎日新聞』1957年8月8日朝刊、9面。

プラノでは滝沢三重子さん」「器楽では鈴木巖君がそれぞれ第一位」,「石井かおるさんがバレエの部で」「第二位に入賞した」と伝えている。<sup>38</sup> また,毎日夕刊では「古典で「鷺娘」が一位」として日舞の市山松葉さんの優勝なども報じている。<sup>39</sup> ここで当然伝えられるべき,民族楽器部門の第一位の報道が欠けていることは邦楽軽視の現れと考えてよいだろう。他方,週刊新潮は民族楽器部門のうち,なぜか唯一,後藤すみ子のみ言及しているが,「後藤すみさんの箏曲金賞」と名前を誤記している。<sup>40</sup> 授賞式は発表の当日8月8日であったが,受賞を知ったのが遅れ,授賞式には間に合わなかった。それでも,各国の代表者たちから祝福を受け,特派員の方々が北京ホテル1階の北京飯店で祝杯を挙げてくれた(後藤談)。彼らの演奏は,《原爆許すまじ》などのうたごえ代表団の演奏とともに,LPレコードに収録され,発売されている。《春の海》(宮城道雄作曲,北原正邦(尺八),後藤すみ子(箏)),《落葉の踊り》(宮城道雄作曲,後藤すみ子(箏),菊地悌子(十七絃),土橋明(三絃))が収録曲であった。<sup>41</sup> なお,日本代表団にとっての友好祭のハイライトは,8月6日,すなわち広島原爆記念日に午後10時よりマネージ広場で開催された,原水爆反対の野外大集会であり(十数万人が街路を埋めた),永田尚子が演説し,ワルシャワ大会に続いて《原爆許すまじ》の合唱が(審査員として訪ソした井上頼豊<sup>42</sup>の指揮するオーケストラ伴奏により)響き渡った。<sup>43</sup>

8月9日には受賞記念コンサートが開かれた。11日には閉幕式を迎え,友好祭を終えたのち,日本代表団は(12日)レニングラード(現・サンクト・ペテルブルグ)へ向かい,しばし観光を楽しんだのち,再びシベリア鉄道に乗り(14日),一路ナホトカへ向かっていった。ギター・コンクールの優勝者,鈴木巖によれば,このシベリア鉄道の旅が,芸術代表団がまとまるきっかけだったという。出番を控えていて練習やりハーサルに余念がなかった往路と



<sup>38</sup> 「声楽の滝沢さん, 器楽の鈴木君が一位 世界友好祭で」『毎日新聞』1957年8月9日朝刊, 9面。

<sup>39</sup> 「古典で「鷺娘」が一位 世界友好祭で」,『毎日新聞』1957年8月8日夕刊, 7面。

<sup>40</sup> 「貧しき百五十人の旅行者 友好祭代表団始末記」『週刊新潮』1957年第38号, 35頁。

<sup>41</sup> LPレコードは以下の通り。「Японские песни и мелодии」(Мелодия, Д 3998-9, 1957)。

<sup>42</sup> 戦前からチェロ奏者として活躍し,シベリア抑留を経て,演奏と教育,ロシア・ソ連音楽の啓蒙に努めながら,うたごえ運動の中核組織である中央合唱団の顧問も務めた。

<sup>43</sup> 「永田さんが訴える 世界青年平和友好祭」『毎日新聞』1957年8月7日夕刊, 3面。川村秀「八月六日夜のモスクワ」『日本とソビエト』1957年9月5日号。

異なり、復路は時間を持て余していたからである。舞踊代表の美二三枝子は以下のように説明する。「列車のなかで、私たち日本人同士も平和友好祭が始まりました。タテ割り社会でしかなかった芸術ジャンルがはじめて同じ世代、同じ心で交流したのです。「あなたがたはそうなの」「私たちはこうなのよ」ということが会話されました。これは画期的なことでした。文化の暁のように私は思いました。<sup>44</sup> 彼らの有志の寄席「西伯利亞<sup>シベリア</sup>亭」さえ開かれた（前頁写真を参照）。入場券が販売され、ダフ屋さえ現れたというから、いかに皆が娯楽に飢えていたかがわかる。

24日早朝、同行してくれた現地の人々との別れを涙ながらに惜しみつつ、ナホトカを発って<sup>45</sup> 新潟に着いたのは8月25日、翌日代表団は新潟日報ホールで解団式を行い、<sup>46</sup> 多くの参加者は急行「越後」で帰京したが、<sup>47</sup> 芸術部門の代表者たちは、別れがたくなり、越後湯沢で途中下車し、温泉で一夜を共にした（後藤，鈴木談）。これが現在まで続く芸術代表団の同窓会「パジャルスタ会」の「結団式」であった。

## 4. 「邦楽4人の会」結成とその意義

### 4-1. 「邦楽4人の会」結成

今一度繰り返すが、邦楽の4人が参加したコンクールは、民族音楽でも民俗音楽でもなく、民族楽器（национальные инструменты）部門であった。そこで日本以外の国々からの参加者の演奏する姿に接したことが彼らに大きな刻印を残すことになった。この独特の部門に参加した経験がいかに特別なものであったか、次の後藤の発言からうかがえる。

そこで体験した事は今迄の考えをすべて替えてしまう程のショックでした。日本では、邦楽というと一段下の音楽に見られていました。モスクワのコンクールの会場で、自国の音楽を誇りをもって輝いて演奏している他国の人の演奏を見て、目を見張りました。そして改めて、日本の伝統音楽のおかれている立場に気がつき、日本人として自国の伝統音楽を守り、誇りをもって伝えて行かねばならないと思いました。

<sup>44</sup> 小林紀子，花柳千代，美二三枝子『踊りに生きる 三人三踊』大月書店，1987年，103頁。

<sup>45</sup> ナホトカの港で「往復とも同じだった食堂車の給仕たち，一行の世話をした沿海州青年共産同盟幹部たち，通訳たちは皆別れを惜しんで手放して泣い」たと舞踊代表の薄井憲二は報告している。「昔の捕虜・今は国賓」『文藝春秋』1957年10月号，285頁。

<sup>46</sup> 『第六回青年学生平和友好祭 報告書』（日本青年団協議会），1957年，78頁。

<sup>47</sup> 「平和祭代表ら上野着」『毎日新聞』1957年8月27日朝刊，9面。

同様の趣旨の回想を菊地梯子も残している。「他国の様々な民族楽器を聴き、日本の伝統音楽を学んできたことを本当に幸せだったとしみじみ思いました。そしてこの体験から自国の音楽をもっと大切に、日本の楽器を使った新しい作品を作ってゆきたいと切実に考えるようになりました」。<sup>48</sup>

彼らの経験を形にするのを助言したのは、代表団選出の際にも、藝大邦楽科設置にもかかわった山根銀二と吉川英史であった。特に山根銀二の関与が重要だったようだ。シベリア鉄道の中でときおり、運動不足解消のために洋舞の美二三枝子の指導で体操をしていたが、その延長で帰国後も、邦楽の4人はギター鈴木巖に山根銀二を巻き込んで、バレエ教室を行っていた。そこには邦楽演奏家として作曲家でもある小野衛（宮城衛）も参加していた。そうして集う中で、「このままだとダメだよな、日本の音楽は博物館行きだよな」との議論となり、「邦楽4人の会」<sup>49</sup>の結成が導かれたのである。その記念すべき第1回の定期演奏会は翌年の1958年10月2日に開催された。プログラムには以下のように創設の辞が述べられているが、邦楽を「民族音楽」として捉えていることが意義深い。

私どもは昨年モスクワの世界青年平和友好祭に参加して、日本音楽を世界各国の人々に紹介して参りました。と同時に世界の民族音楽に接し、改めて、私たち民族音楽に携わる者の責任の深さと、その反面大いなる誇りをも痛感しました。<sup>50</sup>

彼らの生みの親、育ての親とされる山根銀二、吉川英史の両氏も揃って、同じプログラムの冒頭に寄稿し、吉川は「従来は芸格の違う人々が、上下の秩序によって、社中の、一族郎党的結合による演奏団体を作っていたにすぎない。それが近年は、やや自由平等の風潮を入れて、主演と助演とを交替するような演奏会も行われるようにはなった。しかし、真に自由平等の立場で結成された演奏グループは、この四人の会が最初のもの」<sup>51</sup>と評価した。美二三枝子が述べた「タテ割り」ではない精神と同じものをここに見出すことがで

<sup>48</sup> 菊地梯子「現代邦楽とともに（二）邦楽「4人の会」結成」『音楽の世界』2000年2月号、21頁。

<sup>49</sup> 第16回定期演奏会（1969年3月7日）までは、「邦楽「4人の会」」の呼称だったが、第17定期（1969年11月10日）から「邦楽4人の会」の呼称となる。ここでは「邦楽4人の会」で統一した。

<sup>50</sup> 『邦楽「4人の会」 第一回定期演奏会』（プログラム、昭和33年10月2日、大和証券ホール、主催・邦楽「4人の会」）。

<sup>51</sup> 『邦楽「4人の会」 第一回定期演奏会』。この常設の邦楽アンサンブルという性格については、第2回のプログラムに寄稿した田辺尚雄も「わが邦楽界に於て始めて見る理想的な四重奏団」と評している。田辺尚雄「邦楽「4人の会」の成功を祈って」『邦楽「4人の会」 第二回定期演奏会』（プログラム、昭和34年10月14日、大和証券ホール、主催・邦楽「4人の会」）。

きるだろう。その後、彼らの始めた活動は、宮城道雄が先導した「新日本音楽」の運動から一線を画す新たな運動として認められ、「現代邦楽」の呼称が生まれることになる。

#### 4-2. 現代邦楽の流れについて

彼らのその後の活動の意義を考えるために、ここで現代邦楽の歴史について概観しておこう。まず、宮城道雄が創始した新日本音楽の運動を前提として、鈴木嘉代子を先駆者としつつ、「邦楽4人の会」が決然と推し進めた活動から現代邦楽の流れは始まる。上述のように、固定したメンバーによる磨き上げられた邦楽アンサンブルという形態は、本邦初のものであった。そして、作曲家と演奏家とを分離し、自ら作曲するのではなく、特に洋楽畑の作曲家に作品を委嘱することで、邦楽器の新たな可能性を追求していった。

象徴的な作品には、たとえば、藤井凡大《尺八・箏・十七絃のための四重奏曲》(1959)が挙げられる。十七絃は低音域を担当する、箏の改良楽器であり、高音域の箏と低音域の箏と合わせて、3つの箏と尺八と理解することもできる。西洋音楽の弦楽四重奏のアナロジーとしてある程度捉えることもできる編成であり、四重奏のためのソナタとしても理解可能である(後述のように、ソ連の音楽事典では「四重奏団 *квартет*」として記述されている)。<sup>52</sup>

いずれにせよ、箏が中心であることは1960年代半ばまでの現代邦楽の特徴だった。音程が取りやすいことがその要因である。だが、1960年代後半から70年代初頭にかけて箏は相対化され、替わって重視されていったのが特に尺八であった。西洋音楽の観点から見て、ノイズのような要素に富んでおり、五線譜によって「確定」的に記述し難い要素をより多く含む尺八(または琵琶)は、邦楽器を西洋音楽とすり合わせるのではなく、邦楽器の持つ独自性を強調して、西洋音楽を相対化する目的に合致していた。<sup>53</sup>

この変化は、現代音楽において生じたいわゆるジョン・ケージ・ショックと結びついた出来事だった。<sup>54</sup> 1962年に初来日したアメリカの作曲家ジョン・ケージは、コロンビア大学で鈴木大拙に禅を2年間学んだこともあり、東洋思想の影響を受け、偶然性・不確定性の要素を含む作品を送り出していた。その姿勢は、作曲家がすべてをコントロールする西欧の前衛音楽のありかたのアンチテーゼとなり、セリエリズム<sup>55</sup>に象徴される当時の前

<sup>52</sup> «Японская музыка» // Музыкальная энциклопедия, Т. 6. М., 1982. С. 638.

<sup>53</sup> 佐野光司「日本創作界史1956~65」『日本の作曲20世紀(音楽芸術別冊)』音楽之友社, 1999年, 77頁。

<sup>54</sup> 邦楽の観点からの言及は例えば、内道道敬, 如月青子『邦楽・邦舞』岩波書店, 1996年。

<sup>55</sup> 一定の順序で並べられた音(音列)を作曲の基礎として用いる技法(音列技法)。1オクターヴの12音による音列技法を12音技法, それを音高だけでなく, 音色や強弱にまで拡張したものをトー



衛技法の習得にひた走ってきた日本の作曲家たちの姿勢に疑問を投げかける結果となった（こうした、セリエリズムが象徴した前衛的な技法の見直しは、普遍的な現象であり、ソ連ではシュニトケの多様式主義やアルヴォ・ペルトのティンティナブリ様式という形で現れている<sup>56</sup>）。すなわち、現代邦楽の台頭は、西洋音楽の作曲家にとって、西欧の前衛の相対化、およびそれと並行しての不確定性の要素の受容という流れと合致していた。こうした背景をもとに、洋楽の作曲家が邦楽器に取り組むことは、現代邦楽の枠を超えて、前衛音楽の文脈において徐々に一般的なことになっていくのである。

#### 4.3. 「邦楽4人の会」の足跡とその意義

こうした現代邦楽の流れの中で、「4人の会」はどのような位置を占めたとと言えるだろうか。その後の彼らの足跡をたどり、その意義を検討しよう。彼らの定期演奏会は、原則としては、古典・近代（宮城道雄に代表される新日本音楽）・現代邦楽の三本立ての構成を取っていた。この一角をなす現代邦楽こそが彼らが創始したと述べても過言ではない、彼らの活動の柱であった。従来の邦楽では、宮城道雄のように、演奏家が自ら作曲することがほとんどで、作曲家と演奏家は分離されていなかった。<sup>57</sup> 「邦楽4人の会」は、基本的に演奏活動に徹し、作曲家に、それも邦楽の作曲家だけではなく、洋楽の作曲家にも積極的に新作を委嘱することで、邦楽の新しい探求を推し進め、さらに邦楽と洋楽との垣根を崩していった。これも彼らの功績と言える。

定期演奏会には当初から様々な作曲家の初演作品が含まれている。第一回では小野衛《四重奏曲》を初演、第二回では藤井凡大、第三回では伊藤隆太にそれぞれ委嘱し、初演している。世評も高く、第二回は芸術祭奨励賞を受賞、また第二回と第三回の委嘱作品は宮城賞を授与されている。

以後の委嘱について、1978年の時点で北原篁山は以下のように述べている。「第四回定期以降、4人の会が作品を委嘱した作曲家は、松本雅夫、間宮芳生、菅野浩和、杵屋正邦、小山清茂、牧野由多可、清瀬保二、福島雄次郎、安達元彦、諸井誠、野田暉行、助川敏弥、山内忠、廣瀬量平、平吉毅州、三善晃、池辺晋一郎、柴田南雄、P・H・ノルドグレンと

---

タル・セリエリズムと呼ぶ。

<sup>56</sup> ソ連音楽界における前衛的傾向の変容についての日本の作曲界との比較は以下を参照。梅津紀雄「非公式芸術音楽における管理と自由：後期ソ連と冷戦」『工学院大学研究論叢』第53巻第2号、2016年、23-37頁。

<sup>57</sup> 菊地梯子「現代邦楽とともに（一）現代《箏の音楽の流れ》を企画する」『音楽の世界』2000年1月号、20頁。

いう人々である。委嘱以外の作品を含めれば、4人の会のメンバーが加わり初演した現代作品は、二百曲を越しているだろう。<sup>58</sup> 邦楽器への理解不足から洋楽の作曲家に拒否されることが多かった初期から、洋楽畑の作曲家の関与が強まる時期を経て、やがて外国人作曲家へとその活動の輪は広がっていき、1985年にはクセナキス作品《入陽》も初演することになる。総じて、実に多くの現代音楽の作曲家がかかわっていることに驚かされる。彼らの活動はソ連でも評価されていた。6巻本の音楽事典の「日本音楽」の項目には彼らの活動についてのまとまった紹介がある。そこには（若干正確さを欠くとは言え）次のように書かれている。

四重奏団「4人の会」（1957年創設）は世界的に有名である。そのメンバーは、リーダーの北原篁山（尺八）、後藤すみ子（13絃箏）、矢崎明子（箏と三絃）、菊地梯子（17絃箏）である。1957年、まだグループ創設前に、彼らは、モスクワで開催された世界伝統楽器演奏コンクールで（それぞれの部門で）優勝していた。1972年5月、四重奏団はベルゲン（ノルウェー）で開催された国際音楽祭に出演し、ブレーメン、ゲッティンゲン、西ベルリン、ケルン、ハノーファー、ミュンヘン、ジュネーヴ、ウィーンなど、西欧諸都市で（ラジオ・テレビ出演を含む）演奏会を行なっている。このグループのために（彼らの委嘱で）現代の日本の作曲家は四重奏曲を作曲している。<sup>59</sup>

1975年、転機が訪れる。結成時からのメンバー、菊地梯子、矢崎明子が「会」を退会し、3月5日、第30回の定期演奏会がオリジナルの4人のメンバーによる最後の定期となった。これを現代邦楽ブームの曲がり角とみる見方もある。当時「会」は円熟期に入っており、宮城道雄作品の連続演奏会や「現代作曲家シリーズ」、巖本真理弦楽四重奏団との共演など、独自の企画を次々に実施していた故、衰退していたわけではない。しかし（よりフレキシブルな編成を特徴とする）日本音楽集団に代表される後続グループの活動や三曲にとらわれない創作など、新たな展開の到来する中で「邦楽4人の会」の存在が相対化されてきていたことは事実であろう。

「会」はその後、黒沢和雄と高畑美登子を新たなメンバーに迎えて活動を続けるが、1978年、黒沢和雄に替わって角井節子が入会、1979年には角井節子に替わって高田育子が入会した。この体制が1993年まで続き、1994年以降は高田が病欠し、ほぼ3人体制で50

<sup>58</sup> 北原篁山「邦楽4人の会（邦楽界に躍り出た新しい七団体の勢ぞろいと名乗り）」『季刊邦楽』14号、103頁。

<sup>59</sup> «Японская музыка» // Музыкальная энциклопедия, Т. 6. 1982. С. 638.

周年の第70回定期を迎えたが、その際高田の死が伝えられている。最後の定期となったのは第71回（2008年4月22日）。このとき第72回定期（翌年4月）が告知されていたが、実施されることはなかった。リーダーの北原篁山は惜しくも2015年に没している。

現在、オリジナル・メンバーの後藤はソロ・リサイタルと、高畑美登子とのジョイント・リサイタルを年1回ずつ開催し、演奏活動を続けている。その原動力は現代邦楽ブーム終焉後の状況に対する危惧である。「残念ながら、私たちの伝統楽器が伸びるのか、私はものすごく懸念しています。だからまだやっってるの」。

## 5. おわりに

上述のように、モスクワ友好祭では、多くの日本人が現地の人々と交流し、その素朴さや暖かさに印象づけられて帰路についた。「心の底から親切な、お人好しのロシアの」人びととの交流を多くの人が回想している。<sup>60</sup> 芸術代表団はその多くがコンクールで優勝・入賞し、国際的評価に自信をつけて帰国し、いずれもその分野を代表する芸術家となっていく。そして、それまであり得なかった同世代の交流のきっかけとなり、友好祭の思い出を基礎とした交流を前述の同窓会「パジャルスタ会」で今日まで続けるに至る。彼らはソ連やロシア、社会主義を盲目的に信奉する人々でもなければ、反ソ的でも反露的でもない。直接の交流で得られたイメージがあるからだろう。

なかでも邦楽代表団にはさらに別の意義があった。すなわち、友好祭参加の経験で培われた、邦楽器を民族楽器として意識する姿勢である。若手有望株としてコンクールに派遣された彼らも、日本では邦楽器にコンプレックスを感じていた。だが、モスクワで諸外国からの参加者が誇りを持ってそれぞれの民族楽器を弾いている姿に遭遇し、自分たちも誇りを持って邦楽器を弾くべきだと考えた。そして邦楽の博物館行きを避けるべく、現代の作曲家への委嘱を通じて、邦楽の新たな可能性を切り開くことを発想したのであった。「邦楽4人の会」の試みは、やがて日本音楽集団のような後続のグループと共に「現代邦楽」というムーブメントとなり、そして洋楽の作曲家と様々な関係を切り結び、前衛的な語法を取り込みながら、戦後の現代音楽の歴史の一端を担っていくことになったのである。

最後に、これをソ連文化の視点から検討してみたい。

そもそも洋楽が流入するまで、日本には「音楽」という概念はなかったと言われる。流派ごとに分かれて引き継がれてきた伝統は、互いに交わることなく、垣根を隔てて存在し、

---

<sup>60</sup> 薄井憲二「昔の捕虜・今は国賓 八年ぶりに訪れた二度目のソ連邦」『文藝春秋』1957年10月号、285頁。

それらが同じ「音楽」であるという意識はなかった。しかし洋楽が流入してきたとき、洋楽ではない「音楽」として「邦楽」という概念が生じた。だが記譜法すらばらばらであっては流派を超えた対話は簡単に成立し得ない。それは結局、洋楽の「メディア」を通じて成立したと言える。五線譜の導入など西洋音楽の指標から邦楽をとらえることで、それらが同じ「音楽」であり、交流可能だと認識することが可能になったのである。<sup>61</sup> その意味では藝大の邦楽科やNHK邦楽技能者育成会の教育は画期的なものだった。

こうした、西欧化を通じての伝統音楽の近代化というプロセスは、ある程度は普遍的に起こった事象であり、日本やトルコの他、帝政ロシアやソ連でも生じていた。

まず帝政ロシアでは、民間の運動としてバラライカのような民俗楽器が民族楽器として再評価され、半音階への対応などの改良を加えられた。さらに、異なる音域で大きさの異なる楽器が考案されて「大ロシア・オーケストラ」が編成されるに至り、政府の支持も受けていった。<sup>62</sup>

この経験が革命後、ソ連政府に引き継がれる。ソ連は、「民族」を単位にした領域の再編成で生まれた国であり、各民族が自決の主体としての内実をもつべく「民族アイデンティティや民族の自意識を体系的に鼓舞した」。このため音楽においても、各共和国の民俗音楽を「普遍化」する試みが、帝政ロシアをモデルに積極的に展開されている。<sup>63</sup> 民族楽器コンクールは、民族楽器アンサンブル部門を備えている点からみて、おそらくソ連的な「伝統音楽の近代化」を良しとする発想に根ざしていたはずである。であるならば、古典を継承しつつ新日本音楽という形で普遍化を追求してきた日本人演奏家と共鳴関係にあるわけで、邦楽器演奏が高く評価されたのには、それなりの理由があったと言える。<sup>64</sup>

---

<sup>61</sup> 19世紀のスラヴ人会議で共通語がドイツ語だったというエピソードが想起される。

<sup>62</sup> 例えば、柚木かおり「ソ連文化政策が民俗音楽にもたらしたもの：バラライカ「モスクワ80」と奏者たち」『総研大文化科学研究』第1号、2005年を参照。

<sup>63</sup> テリー・マーチン（半谷史郎監修）『アフーマティヴ・アクションの帝国』明石書店、2011年、33頁。カザフスタンの事例については、東田範子「フォークロアからソヴィエト民族文化へ：「カザフ民族音楽」の成立（1920-1942）」『スラヴ研究』第46号、1999年、1-32頁を参照。

<sup>64</sup> 第6回モスクワ友好祭における日本人の活躍について、想起されるのは1957年夏という微妙な時期である。友好祭直後の8～9月のポリショイ・バレエ初来日に象徴されるように、国交回復前後の時期、ソ連は「文化使節団を次々と日本へ送り込ん」でいた。当時ソ連が、「日本の中立化による日米離間の幻想」を抱いていたことが背景にある（半谷史郎「国交回復前後の日ソ文化交流：一九五四～六一年 ポリショイ・バレエと歌舞伎」『思想』（岩波書店）2006年6月号、通算987号）。他方で、この後の友好祭では日本人の活躍が話題になったことがない。モスクワ友好祭が旅券闘争を経て、初めて日本から本格的に代表団を送った大会であったことと合わせて、当時、ソ連にとって日本が特別な存在となっていたことは確かであろう。いずれにしても、この時に受賞した人々が日本で各界を代表する芸術家となったのは確たる事実である。「邦楽4人の会」の活動は、その輝かしい象徴である。

以上に確認したように、モスクワ友好祭で実施された民族楽器コンクールは、ロシアともソ連とも直接関係のない邦楽団体の活動に、実は目に見えない点で深い影響を与えていた。冷戦のさなかのソ連との文化交流の独自の事例として、注目に値すると思われる。

Рождение «Группы четырёх» японской традиционной музыки:  
Фестиваль молодёжи и студентов в Москве (1957)  
в воспоминаниях японских участников

УМЭЦУ Норио, ХАНЬЯ Сиро

В 1957 году в Москве прошёл Всемирный фестиваль молодёжи и студентов: в течении двух недель в Москве побывали 34 тысяч человек из 131 стран мира. Такая открытость, невообразимая при Сталине, впервые предоставила советским людям возможность в массе общаться с иностранцами и знакомиться с западными культурами. Как известно, он является одним из важнейших событий в истории советской культуры.

В фестивале участвовала и японская делегация в составе 155 человек. Они не только участвовали, но и победили на разных конкурсах, проведенных в рамках фестиваля (национальные инструменты, гитара, народный танец, классическое пение). Более того, 6-го августа, в день памяти жертв атомной бомбардировки г. Хиросимы, по инициативе японской делегации был проведен многотысячный митинг за мир на Манежной площади.

В данной статье, основывая на устном источнике японцев-участников фестиваля (сейчас они уже старики около 85 лет, а мы пока успели услышать воспоминания семи человек), мы попытаемся подробно восстановить общую картину, как они приняли участие во всемирный праздник за мир и дружбу.

При этом обращаем особое внимание на госпожу Сумико Гото, исполнительницу японского традиционного инструмента «кото», которая завоевала первую премию на конкурсе национальных инструментов. В её жизни московские дни стали действительно

переворотным пунктом. Она, будучи неуверенной в будущее японской традиционной музыки, одушевилась результатом конкурса и решила открывать новый путь в художественном развитии национальных инструментов: в 1957 году, вместе с другими участниками фестиваля, она создала «Группу четырёх» японской традиционной музыки, которая сделала эпоху в истории данной области.